

巻 頭 言

『立正大学人文科学研究所規定』には、本研究所の目的が「人文科学に関する調査研究を行い、学術の進歩発展に寄与すること」と規定されている。本年度をもって定年退職される前々々所長の尾形勇教授は、所長就任（平成13年度）にあたって、その趣旨をさらに「学科や専攻の枠を超えて学術の交流につとめ、同時に学際的な研究の実をあげることが、人文科学研究所の設立の目的であり……」と敷衍された。まことに適格な方向づけである。

本研究所は学内制度的には文学部付置の研究所である。その文学部は、哲学・歴史学・社会学・日本文学・英米文学といった多様な学科・専攻を抱えており、その意味でまさに「学科や専攻の枠を超えて学術の交流につとめ、同時に学際的な研究の実をあげる」ということが、他の学部付置研究所にはない本研究所の重要な任務となってくる。

たしかに、人文科学という括りはたいへん広い括りである。その中には多様な専門分野が含まれる。下手をすると、各人各人がそれぞれ個別に研究を進めているという事態になりかねないわけだが、むしろそのスケール・メリットを創造的に生かしうるような研究機関にしていこうではないか。尾形教授はそのことを強調されたのだと思う。

その具体的な形をなすものが、共同研究（A）と共同研究（B）である。前者は所員個々の研究に対して、後者は数人の所員からなるグループに対して研究助成がなされるものであるが、個人研究であっても「共同研究」と銘打っているのは、そうした学術交流の成果という含みがあるからである。いずれも毎月の定例発表会における学科・専攻の枠を超えた活発な質疑・討論を経て、その成果が公表される。

本年報第45号には、5本の研究論文と9本の発表・講演要旨を掲載することができた。いずれも所員諸氏の倦むことなき調査研究の成果であり、多くの貴重な知見が示されている。

共同研究（B）は、「身体論の現在に向けて」グループ（代表手川誠士郎教授）が本年度で3年間の研究期間を終え、その成果が1年以内に本年報『別冊』として刊行される予定である。次年度からは新たに「歴史・社会叙述とテキスト」グループ（代表坂巻清教授）が立ち上げられることになった。ますます活発な学術交流がなされることを期待したい。

はからずも前所長の仁木勝治教授から人文科学研究所長という重責を受け継ぐことになったが、とりあえずは歴代所長の敷かれた路線を踏襲しつつ、所員諸氏相互のさらなる研究交流に向けて、少しでも風通しをよくする役割を果たせればと考えている。

平成20（2008）年2月

立正大学人文科学研究所長 望 月 哲 也